

哲學研究

第三百二十七號

第二十八卷
第六冊

社會の成立

淡野安太郎

一 始 原

人は自然から生れねばならぬ。しかし人は獨りで生れるのではない。人は人の間へ生れることによつて「人間」になるのである。しかし又、その「人の間」なるものも決して既に出來上つたものとして豫めそこに興へられて居るものではない。人は「人の間」をつくることによつて「人の間」へ生れるのである。従つて若し人の間の全體を社會と呼ぶならば、社會と人間といふ二つのものが別々にあるのでなく、又その先後が問はるべきではなくして、社會の誕生と人間の誕生とは相即同時であると云はねばならぬ。此の意味に於て、人間は社會的存在

なのである。

しかし他面、吾々人間の足が地面を離れることができな以上、吾々は身體を媒介として自然物とも密接不可分の關係をもつ。吾々の生活が物をはなれては成立たないといふ意味に於て「人の間」の世界も「自然物」の世界から遊離してはあり得ないのである。勿論、自然物の中に埋没してしまつて居る限り、未だ固有の意味に於ての人間の誕生はない。人はむしろ自然に背くことによつて人間となるのである。その場合自然に背くといふのは、實は自然に背を向けることではなくして、一應自然と對立し且つ自然に従ひつつ却つて自然を従はしめることによつて、換言すれば「ものをつくる」はたらきに於ての

み、人間が生れることを意味するのである。ものをつくるはたらしに於て人間は生れ、人の間をつくることに於て人間となる——その「ものをつくること」と「人の間をつくること」とは、相互に如何なる關係に立つものなのであらうか。物を媒介としての人と人との關係・或は人と人との關係を豫想した上での人と物との交渉をはなれて、凡そ人間の生活なるものはあり得ないとするならば、それはいつたい如何なる事態を意味するのであらうか。

人間は「道具を使ふ動物」であるとか「道具をつくる動物」であるとか謂はれる。その際、使はれる道具は勿論つくられた道具であり、つくられる道具は使はれんがための道具であることは云ふ迄もないが、それにも拘らず使はれる道具がつくられたものであることの方がより根本的である點に注意が向けられねばならぬ。——そもそも道具の濫觴は石器であり、最初原人の手が單純な打缺を施した不整形の槌石を握つた瞬間に人の手は猿の手から區別せられた、と謂はれる。槌石を使ふことが有り合はせの石塊を使ふのと本質的に違ふ所以は、槌石がとかく一定の目的のためにつくられたものであるといふ

點にある。それは猿が有り合はせの棒切れを手にもつことによつてその手を一層長くする場合とは根本的に異なるのである。自然的器官をいかに延長しても單にそれのみにとどまるならば、それは依然として自然であつて未だ「人の手」は生れ出て來ない。一定の目的のためにつくられた道具を手にするによつてはじめて、自然的器官としての手が「人の手」に質的に飛躍するのである。更にその手にする道具が單に自然の恣意なる贈物としての石や木に加工したものから、材料そのものの内的性質までも變へる熔解合金の産みだした金屬の道具を用ひるに到つて、人間はその「つくるもの」としての眞面目を遺憾なく發揮し得たのであり、原理上全自然を自らの中に包含する「歴史」の世界が輝しくひらけて來ることになつたのである。かくして人間は「道具をつくる動物」となることによつて勝義の「道具を使ふ動物」となつたのであり、つくることがよりもより根本的であること云はねばならないのである。

ところで、人の手は一人の手ではない。一人は未だ人ではない。彼のロビンソン物語は、豫め既に文明社會に於て人となつた人間が偶然無人島に漂流して、潜在的に

蓄積されて居た社會的生産力を序々に發揮して行く物語に他ならぬ。従つてロビンソンの手は既に社會の手だつたのである。たとひ原人の群落 (Hort) が——中央オーストラリアの普通四五十人の人員を包容するところの——現在最も野蛮な土人の群落よりもつと小さなものであつたとしても、單に孤立的に夫婦だけで生活して居る原人が有節言語をつくり出し、その非常に簡單な武器を以てして氷河時代の巨獸との闘争に勝ち得たとは、どうしても考へられない。多數の人間が力を合はせることによつてのみ打ち倒し得るかかる巨獸の存在は、既にそれだけで——原人に社會本能なるものがなかつたとしても——共同的結合を餘儀なくさせたであらう。現に、大抵の古洪積層紀及び中洪積層紀の出土箇所にては、明かに相當大きな人間共同體が屯在した筈であると思はしめるだけの量の石器の發見が報告せられて居るのである。しかも古語に於て多くの場合、道具と武器とが區別されて居ないことは、當時生きることが生命を培つて闘ふことであり、文字通り運命を共にするものとしてののみ、人間が生存し得たことを物語るものであらう。

かくして、人の手は本來社會の手であつた。人は決し

て一人で物にはたらきかけたのではなく社會を形成するものとして自然物と交渉したのであり、又逆に、共同して物にはたらきかけることによつて人間の社會をつくり上げて行つたのである。古來人間の生活を調整し來つたものは——物理的時間とは明確に區別さるべき——「曆」であるが、その曆は實は集團的活動のリズムを表はすものとして既にそれは一つの社會制度であつた。(一)動物は未だ「曆」を知らず、又それぞれ異なる情的價值 (values affectives differences) をもつた「方位」も知らないであらう。社會的時間ともいふべき「曆」及び社會的空間ともいふべき「方位」をもつことによつて、人ははじめ「人間」となることができたのである。——かやうに曆は社會的時間であり方位は社會的空間であるといふことはしかし決して、これら二つの範疇が自然から區別せられた單なる社會の状態のみを示すものと解されてはならぬ。若しさうであるならば、これらの範疇が如何にして自然に適用され得るであらうか。集團的活動が有効に行はれるためには、自然的條件を無視することは出来ぬ。自然を無視して蒔かれた種が豊かな收穫を齎す筈はないのである。同様に、自然的條件を無視して設けられた住

居は、到底生活を支へることはできないであらう。かくして生きた具體的な社會生活の姿であるリズムは自然と人爲の合奏であると云はねばならぬ。それは人間社會そのものが、自然と人爲の結びつきによつてのみ成立し得るものであることを物語るものに他ならぬのである。

(1) Durkheim: *Les formes élémentaires de la vie religieuse*, p. 15.

而して自然と人爲の結びつきを、神々の手を通して渾然たる融合の姿に於て示すものが一般に神話・傳説の世界である。しかしこれに對しては、ローマの傳説がその反證として擧げられるかも知れぬ。いかにもローマの傳説に於ては一つとしておのづから生成したものはなく、凡てが意圖を以てつくられたものとして語られて居る。國家も法も宗教も凡てローマが自分自身の中からつくり出すのである。かくして自然のままの野蠻狀態・個人のアトムの並存から、民族と國家が形成され文化と宗教をもつに到るまでの過程がはじめから辿られる。——ローマがその始めの仕度としてもつものは、逞ましい腕力をもつて歴史の發端に立つ男達・道徳的には丸裸のままて岸邊にうちあげられた難船者のみである。これらの者

は過去をもたない四方八方からの寄集りであり、従つて何等共通の法・共通の神々を伴はず、そこには恣意と暴力の支配が見られたのみであつた。ローマの發生物語に於けるかかる第一の場面に續いて現はれる第二の場面は、共同體の成立である。それは最初掠奪を目的とした結合ではあるが、軍隊の力によつて維持されるものとして、既に國家の始りをそこに見出すことができる。やがてそれに王位が確立され他民族との結合も加はつて來て、ローマ第二代の王 *Numa Pompilius* に至つて、はじめて宗教と道徳が現はれる。スマ王の精神はその先代の好戰的性格と著しい對照をなして飽くまで平和的であり、ギリシヤ語の *ノモス* から由來するその名の如く、法的組織の時代を象徴するものと解せられる。即ち、外に對しては平和の狀態が確保され内に於ては秩序ある生活の諸條件が保證せられるに及んで、民族の教化が始められる時期が到來したのである。尤も第三代目の王 *Tullus Hostilius* の時に今一度昔の野蠻狀態が再びよみがへるのであるが、しかしそれは外へ向つての戰爭に於てであつて、彼の後繼者 *Anus Martins* は諸々の地方の住民をローマに合體させ、それに法的形態を興へることによつて國際法の

代表者となつたのである。

ローマの創世はそこで終つて居る。此の創世紀はそれが全世界を無或は混沌の中から短い時間の中に生成せしめ、しかも世界の一つ一つの部分を——かの聖書の天地創造の如く——順序を追ふて別々に實現させて居る點に於て、舊約の創世紀と或る種の類似性をもつて居るといふこともできるであらう。しかし、その順序に特異なもののあることが見逃されてはならぬ。それが混沌すなはちかの個人的衝動と恣意の支配する状態からはじまつて國際法に終つて居る點は全く定石通りであるが、しかし「法ははじめに宗教的性格をもち後に始めて世俗的性格をおびる」といふ歴史の常則は、ここでは全く顛倒されて居るのである。吾々はここに、本來行動力に富むローマ人の世界觀の一つの著しい特色を見出すことができるのであるが、イエーリンクは「ローマの傳説はローマ後代の偉大さをそれと對照的に益々榮えあるものとせんがために、ローマの始まりをできるだけ見すばらしいものにして、原住民を何の結合もたない個々人の寄り集りとして叙述して居るのである」とローマの傳説の中に含まれて居る非眞實性を抉剔して居る。(一)

社會の成立

(一) Ihering: Geist des römischen Rechts auf den verschiedenen Stufen seiner Entwicklung, Erster Theil, S. 99.

いつたい全く裸の「原始人」がローマを建設したといふ様なことが、果して考へられ得るであらうか。ローマの建設に協力したものはいつれも既に或る組織された團體に屬して居たものとして、既に一種の歴史的な仕度を整へて來たのではあるまいか。それとも、彼等は傳來の神々や法の諸概念や凡ゆる道德的教養を一切投げすて、再び野獸になつてしまつたのであらうか。さうして、かかる強盜や人殺しどもの中から極めて短期間のうちに法といふものが出來上つたのであらうか。或はそれともローマ第一代の王 Romulus が勝手に一つの法をつくり、しかもその法は元來ばらばらで放埒な住民の間にたちどころにして、父祖傳來の法にしてはじめてもち得る様な力と影響を及ぼしたのであらうか。イエーリンクは、——他の點に於てはローマの精神を正しく把へて居る——ヘーゲルがローマを「本來つくられたものであつて何等根源的でないもの」(der aus von Haus aus Genacktes, nichts Ursprüngliches) と觀ることを非難し、か

くては法はいはゞ手に負へぬ野獸にかけられた手綱といふことになるであらうし、國家は——野獸が猛獸使ひの監視の下に近隣を荒し廻る時だけそれから出して貰へる——監の様なものになつてしまふであらう。といふ。(一)

(一) *ibid.* S. 100.

ローマの傳説はローマ人のために、何も無いところからはじめて凡てのものを自分自身の中からつくり出したといふ榮譽を要求しようとする。しかしイエーリンクに依ればローマの建設者達は、彼等が故郷に於て經驗してゐた共同體的生活をそのまま——家族・財産・宗教・制度と共に——携へて他の所で續けて行く移住者に比せられるべきものであつた、といふのが事態の真相なのである。勿論、個々別々にローマに赴いた者も澤山あつたであらうし、またローマが犯罪者の遠くから身を寄せる避難所であつたことも事實であらう。しかし何れにしても、そこには住民の確たる中核をなす種族が存在して居て、かのアトム的な構成分子はそれ以後から加はり同化したのに過ぎないのである。そして此の中核たる種族は祖先傳來の諸制度の擔ひ手として、國家とその諸制度に對し本來の堅固さを確保したのである。それ故にローマに於

ける法と國家の形成は第一次的のものではなくして第二次的のものであつた、即ちそれは既に形成されてあるものを基礎として成し遂げられたのであつて、ローマははじめから歴史の持參金を携へて居たのである、とイエーリンクは云ふ。(一) かくしてローマの社會も決して何も無いところに全く新たにつくり上げられたものではなかつた。しからば一般に、人間社會の根源となるものは如何なるものなのであらうか。

(一) *ibid.* S. 101.

二 未開人の心性(その一)

——所謂「論理以前の」の意義

「未開」はもちろん直ちに「原始」ではない。現在開化が未だ充分ではないといふことが、そのまま直ちに歴史的に最初であるといふことにならないのは云ふ迄もない。現在に於ては未開人も亦それぞれ長い歴史をもつて居る筈だからである。しかし吾々の索めるのは人間社會の原始的狀態ではなくして、むしろその始原的或は根源的形態であるが故に、未開人の心性を手懸りとして探求の途に上ることも一應は許されるであらう。

ところで、未開人の考へ方が文明人の法則科學的思惟と全然種類を異にする所謂「論理以前の」なものであるか、それとも兩者の相異は本來同一軌道上の進行距離の差即ち單なる程度の差に過ぎないものであるか、について論争のあることは周知の通りである。現代文化の意義を一層際立たせ、併せてその由緒を何か知ら神祕的なるものにもとめたい氣持は、無條件に「論理以前」論に魅力を感じずともあらう。しかしそれは、現在の一夫一婦制を特に權威づけ意味づけるために亂婚或は群婚が一般に原始人の間に、否今日猶一部未開人の間に行はれて居るかの如く主張すると全く同じ現代人の氣持なのであるまいか。(一)

(一) 未開社會に於ても一夫一婦婚が普遍的であることについては、岡田謙氏がその著「原始社會」(六一二〇頁)の中に明快に論議せられて居る。

レヴィ・ブリュールは云ふ。「吾々の日常の活動は最も些細な事柄にいたるまで、自然法則の不變性に對する安心しきつた全き信頼を含んで居る。……未開人の精神の態度はそれとは遙かに違つたものであつて、未開人がそのたゞ中に生きて居る自然は全く異なる姿で彼に現は

れる。(「即ち」凡ての事物凡ての生物はそこでは神祕的な融即(participation)と拒斥(exclusion)の織り交ぜの中に含まれて居るのである」と。)(二)これに對してベルグソンは主張する。(三)未開人についても亦「彼の日常の活動は自然法則の不變性に對する全き信頼を含んで居る」と云はれないであらうか。かかる信頼なしには、未開人はその獨木舟を運ぶために川の流れを當てにし、その矢を飛ばすために弓の張力を當てにはしないであらう。勿論、未開人は自然因果性といふ様なものを明瞭には表象しないかも知れぬ。しかしそれは未開人が物理學者でも哲學者でもないからである、と。(三)

(一) Lévy-Bruhl: *La mentalité primitive*, p. 17-18.

(二) デュルケムも亦レヴィ・ブリュールに反對して、未開人の心性或は論理が吾々の心性或は論理と何等性質的に異なるものではなく、兩者の相異は單なる發達程度の差にすぎないことを主張して居る (*Les formes élémentaires de la vie religieuse*, p. 340-342.)。

(三) Bergson: *Les deux sources de la morale et de la religion*, p. 151-152.

此のベルグソンの批評に對して、レヴィ・ブリュールは恐らく次の如く答へることであらう。——未開人と雖

も若し彼が集團表象から獨立に考へ獨立に行動する場合があるならば、個人として觀られる限り彼も亦大概は吾吾がさうするであらうと思ふ様な仕方で感じ・判斷し・行動するであらう。例へば二羽の鳥を撃ち落してしかも一羽しか拾へないとき、彼は他の一羽はどうなつたのであらうかと思ひそれを捜すであらう。しかし集團的である限り未開人の考へ方は、吾々とは全然違つた——それ固有の——法則をもつて居るのである、と、(一)

(一) Lévy-Bruhl: Les fonctions mentales dans les sociétés inférieures, p. 79-82.

即ち、未開人の考へ方はその表象の内容からいへば神祕的であり、その表象の結びつき方からいへば論理以前のである、とレヴィ・ブリニールは云ふ。(一) しかれば先づ、神祕的な内容と稱せられるものは如何なるものであらうか。未開人達は嵐の最中一人の男が、飛び來つた岩の破片のために頭蓋骨を碎れて死ぬのを見ると、それは疑もなく怒り狂つた靈がその男を殺したのであるといふ。かくの如く一般に未開人が所謂「超自然的な神祕的原因」に訴へることは、何を物語るのであらうか。その場合、眼に見える世界の出來事例へば飛び來つた岩の破片が頭

にあたつたといふ事實は、實は眼に見えない神祕的な力のはたらく單なる機縁 (occasion) となつたに過ぎないのであつて、神祕的な力こそ眞の——しかも唯一の——原因であると解するならば、(二) それはおのづから occasionnalisme を、更にそれを一層神祕化したマールブランシュを想到せしめるであらう。事實また、未開人の考へ方の最も根本的な特色が participation と呼ばれるとき、それはマールブランシュの言ひ表はし方に従つたものであることを、レヴィ・ブリニール自身一度ならずことわつて居るのである。(三) 吾々は未開人の集團的な表象の仕方が融即 (participation) と呼ばれることに聊も異議を唱へるものではなく、むしろそれを手懸りとして人間社會の始原的な形態を明かにして行きたいと思ふのであるが、單に神祕的な見えざる力が絶えず眼に見える世界の中へ關與する (intervent) といふだけのことであるならば、それをしも猶一種の participation と呼びそれが未開人獨特の考へ方であるかの如く主張することに對しては、疑なきを得ないのである。マールブランシュに於ては、イデーが神から出て人間の精神に入り來るべき途はなく、その故にこそ吾々の認識は吾々の方から神へ歸入す

る participatio substantivæ divinæ」としてよりほかにあり得なかつたといふ様なことにはここでは深く立ち入らないとしても、眼に見える世界の出来事を眼に見えない世界の神秘的な力によつて説明することは、必ずしも未開人獨特のものとは云へないのであるまいか。殊にその場合たづねられて居るものは自然物と自然物との間の關係ではなくして、——此の關係については未開人と雖も相當進んだ合理的理解を實際の行動に於て示して居るのである、——さうではなくしてここではその出来事のもつ人間的意味、即ち人間に對してもつ意味が問はれて居るのである。(一般に意味と稱せられるものは、見えざる世界より由來するものとしてより他にはあり得ないであらう。) されば例へば震災や水害を天罰と観ずる文明人の考へ方との間に、そこに果してどれだけの差があるであらうか。若し自然法則への信頼が文明人の心性を特色づけるものとすれば、吾々は未開人に於ける文明人の心性を見逃すことが出来ない様に、逆に又、人間的意味の解明を超自然的なるものに求めることを未開人の心性の特色とするならば、吾々は同様に文明人に於ける未開人の心性をも語らねばならないのではあるまい

か。(四)

- (一) Lévy-Bruhl : Les fonctions mentales etc., p. 78-79.
 (二) Lévy-Bruhl : La mentalité primitive, p. 219.
 (三) Lévy-Bruhl : Les fonctions mentales etc., p. 105 ; p. 397.

(四) レヴィ・ブリエールは「未開人も吾々と同じ眼でものを見て居る。〔しかし〕同じエスプリで感知するのではなく』と云ふ (Les fonctions mentales etc., p. 38)。確に未開人の關心が主として人間的意味に向けられて居ることは否定することのできない事實である。此の點に着目するならば、未開人に於ては——自然を自然として眺めることに慣れて居る文明人とは——その考へ方が違つた方向に向けられて居る (autrement orienté) といふこともできであらう。しかしそれだからといつて「未開人にとつては吾吾がいふ様な本來の意味に於て Phys. tree な事實はない」(ibid., p. 2738) と言ひきるのには、極端に過ぎるのであるまいか。そこまで極端に主張しない迄も、しかし多くの場合未開社會の實地調査にたづきはつて居る人達は、未開人が農耕・狩獵・漁撈などに於て驚く程合理的な處置を講じながら、しかも猶同時に靈的存在の保護をうけることなしには所期の効果を擧げ得ないことを深く信じて居ること、従つて彼等に於ては合理的活動と宗教的行事とが離れ難く結びついて居ることを専ら力説する。しかし現代の吾

吾と雖も一方に於て科學の粹をつくしながら、しかも同時に他方に於て五穀豐稔を祈願し武運長久を祈らざるを得ないではないか。未開人に於ても、また文明人に於ても、宗教の世界はつねに經驗的な自然界の上に——デュルケムの言葉を借りて云へば——“superposer”されて居るのである。そしてまさにこのことが——唯一つの世界しか知らない動物に對して——人間にのみ恵まれた特權を形づくるものと云ふべきなのであらう (Les formes élementaires de la vie religieuse, p. 328; p. 602-603)。未開社會を神秘化することは、機械文明の中に喘ぐ現代人の嗜好にかなつたことかも知れないけれども、一般に相違は必要以上に誇張されてはならない。

以上述べ來つたところによつて、未開人の考へ方の特色は單なる生きるための營みや又眼に見える世界の出來事を眼に見えない力のはたらきに歸することなどの中に索むべきではないことが明かとなつた。それらのものは——後者も亦前者と同様——實は未だ勝義の集團的表象とはいへないのである。未開人の考へ方の特質は、あくまでその集團的な表象の結びつき方に求められなければならぬ。而してレヴィ・ブリューの力説する論理以前性も此の勝義の集團的表象の結びつき方については、充分顧慮さるべき意味をもつて居るのである。

然らばその場合「論理以前の」といふのは如何なる意味であらうか。或る報告に依れば「ポロロ族は自分達は本當に金剛いんこである」と平氣で言つて聞かせる」といふ。(一)此の全然違つた二つの表象の本質的同一性を主張する未開人獨特の結びつけ方をレヴィ・ブリューは論理以前のと呼ぶ。他によりよき言葉がないためではあるが、レヴィ・ブリュー自身認めて居る様に此の論理以前の (prélogique) と云ふのは、あまり適切な言葉ではない。といふのは、それは決して論理的思惟の誕生に時間的に先立つ一つの段階を意味しては居ないからである。又、それは反論理的でもなければ無論理的でもない。未開人の考へ方が論理以前のと呼ばれるとき、それはたゞ吾々の考へ方の様に何よりも先づ矛盾を避けようとは強ひてつとめはしない、といふだけのことなのである。といつて又反對に、たゞわけもなく矛盾するものを樂しむといふのでもない。大概の場合、未開人はさういふ事柄には一向無頓着なのである。(二)——それが論理以前のと呼ばれるものの真相に他ならぬ。しかし、かかる意味に於て論理以前のであることは、未開人の心性の特徴をただ消極的に規定したものに過ぎぬ。しかれば、その積極

的な特徴は如何なるものであらうか。

(I) K. von den Steinen: Unter den Naturvölkern Zentralbrasilien, S. 305-6.

(II) Lévy-Bruhl: Les fonctions mentales etc., p. 79.

三 未開人の心性 (その二)

——融即と拒斥

右に述べたるが如き意味に於て論理以前のな心性をもつた未開人にとつては「凡てのものは神秘的な融即と拒斥の織り交ぜの中に含まれて居る」と謂はれる。それは具體的に何を意味するのであらうか。

多くの未開社會探訪者の報告に依れば、未開人達がその祖先の物語を言つて聞かせるのは、必ず何等か異常なる感じを與へる地域であるといふ。例へば、聳立つ山嶽・怪奇なる地形・重疊たる岩石・奥深い洞穴・鬱葱たる森林・浪漫的な泉・渦巻く溪流・怒濤の押しよせる海濱など。これら人の眼をみはらせる奇しき自然の貌は、種々なる出來事を想像せしめて數々の物語を生み、逆に又それらの物語はまのあたりに見る異様な自然の姿の中に彼等の祖先の活躍振りが如實に刻み込まれて居るかの如く感ぜしめるのである。(I) 此の特定の地域と祖先の物語

との相互的融即は、しかしながら、未だ抽象的な言葉を知らない未開人にとつては何等かの形に於て具象化されねばならぬ。若しそこに色・形など著しい特色をもつた動植物が見出されるならば、何よりも先づそれが撰ばれるであらう。若しそこに目に立つ動植物がないならば、

人工物或は特定の場所そのものが同じ相互的融即を象徴することとなるであらう。トイテム或はトイテム的なる場所 (lien fetémique) と稱せられるものは、恐らくかくの如くにして生れたのであらう。かくして祖先の物語が現に眼の前にある具象的なるものに於てその地域と融即せしめられる時、それは單なる昔の物語ではなくして今の出來事となり、祖先は昔も今も生きて居ることとなるであらう。否、祖先と地域とが融即するばかりではない。それは同時に彼等の集團そのものとも別のものではないのである。祖先と一體となつた彼等の居住地域及び其處にある凡てのものが「自分達のもの」と呼ばれる時、それは單に「自分達の所有するもの」といふ様な外面的な關係を意味するのではない。自分達のものとは實は自分達自身に他ならぬ。従つて、その地域をはなれて自分達なるものはあり得ないのである。これ即ち、未開人にと

つてはその地域をはなれることが文字通り「死」を意味する所以である。〔1〕かくの如き——トーテム或はトーテム的なるものに於ける——地域と祖先と集團との相互的融即 (participation réciproque) 或は共生 (symbiose) 卽こそ、未開人の心性の最も原本的な特徴を形づくるものなではあるまいか。〔2〕ボロロ族が「自分達は本當に金剛いんこである」と平氣で言つて聞かせる意味も、かくして正當に理解され得るのではないかと私は考へるのである。

〔1〕 Lévy-Bruhl: La mythologie primitive, p. 18-23.

〔2〕 未開社會に於て大罪人が追放に處せられることによつて万事畢れりとせられる例は枚擧に遑がないであらう。それはしかし、文明社會に於ける退去命令と混同されてはならぬ。卽ち退去命令が單にその人間の活動を除外するものであるのに對して、未開社會に於ける追放はそれによつてその人間自體が文字通り死んだものとせられるのである。卽ち追放は死刑と全く同一の刑罰なのである。——更にかかると考へ方を證明する事實として、既に白人と多くの交渉をもちその結果生れてはじめて住みなれた土地をはなれなければならなくなつた土人が、常にその郷土の土を少しばかり紙に包んで身につけて居ることなども、多くの報告に見えるところである。卽ち土人はその「土」をはなれては生

きて行くことができないのである。

〔3〕 Elsdon Best がその著 "The Maori" の中で指摘するところに依れば、マオリ族に於ては「個々の土人は自己を完全にその部族と同一視して居る。従つて部族一般のことについて語る場合にも、第一人稱を用ひることが屢々である。恐らく十世代も前にあつた戰爭を語るに當つて彼は『自分はその戦で敵を殺した』といふ。また同じ様に、手振りて無難作に「万エーカーにも互る土地を指示して『あそこに自分の土地がある』といふ」(I. p. 34a)。

〔4〕 Symbiosis (共生) と云ふ言葉は、近世菌類學の基礎を築いた Heinrich Anton De Bary (1831-1888) が斯學に導入した用語で De Bary 自身は、地衣類に於ける藻的要素と菌的要素との間、若くは單細胞藻類と放射蟲との間に存する様な親密かつ補充的な生理學的共同性を主として意味させたのであるが、ここでは單に「補充的」といふ様な外面的依存關係よりも、もつと内面的に融合して文字通り一つになつて生きて居る事態を指す。

〔5〕 私は未開人の考へ方の特質を究めるために先づ、單なる生きるための營みや又眼に見える世界の出來事を眼に見えない力の作用に歸することなどに於ては、未開人と文明人との間に根本的な相異のない所以を明かにし、遂に靜義の集團的表象に到つて特異な「相互的融即」を未開人の考へ方の原本的な特徴として見出したのである。

しかし以上のことは決して、未開人の考へ方の中に單なる生きるための養みと眼に見えない力の作用に訴へることと勝義の集團的表象との三つ、ものが、分離して別々に見出されるといふ意味に解されてはならぬ。分離は追究のための分析が要求したのであつて、現實には前二者と雖も多分に集團的表象の特色たる——地域と祖先と集團との——相互的融即によつて色づけられて居ることは、論を俟たないところである。

相互的融即の具象的表現としてのトーテム或はトーテム的なるもの(1)を中心として地域と祖先と集團とが一體をなすとき、そこに一つの閉ぢた人間社會が成立するであらう。しかしそれは決して、おのづから成りおのづから在るものではない。従つてそれは固定し靜止したものではない。單におのづから成るもの或は固定し靜止したものは未だ人間の社會ではないであらう。鶏の群の内部に於ては、おのづから成立した「啄く順位」(Peck order) (2)はいつまでも狂はざれることがないと謂はれる。(3)これに似た現象は他の動物の群生活に於ても決して珍らしくはないのであつて、かくして動物の群が固定した閉ぢた組織をもつ結果は、各個體の機能を弱小化することによつてのみ限られた生活空間に於て群全體が存續し得

るといふ事態を必然的に招來するに到るのである。個體が弱小となることによつてのみ、全體が強大となることのできる、——これは動物の群生活に於ける鐵則である。而して此の鐵則を破壊し個體が強大となりつつ全體も強大となることを庶幾するところに、はじめて人間の社會が動物の群から生れ出ることになるのである。勿論、個體の強大化と全體の強大化とは決して豫定調和的におのづから一致するものではない。此の世は爾く安穩な樂土ではない。個體についても全體についても、人生行路上生きることは努力することである(Teben ist Streben)。その努力の過程に於ては、一つの全體が他の全體と鬭争するばかりでなく、同一全體の内部に於ても個體は全體を破壊しようとし全體は個體を抑壓しようとする様な貌を呈することもあるであらう。かくして人間の世界に於ては、いかに閉ぢた社會と雖もその基礎をなす地域と祖先と集團の一體性は、常に内外よりの破壊作用に對して守られねばならないのである。即ち、外よりの侵略を拒斥すると共に、内よりの離反をも拒斥しなければならぬ。これ即ち、融即は拒斥と相表裏し、トーテムがタブーを伴はざるを得ない所以である。

(一) トーテム或はトーテム的なるものは地域と祖先と集團の相互的融即の具象的表現であるといふとき、それは云ふ迄もなく根源的形態に於けるトーテムを指して居るのであつて、部族が次第に多くの獨立した集團に分裂するに従ひ、尖々の集團を相互に區別するためにそれだけ多くのトーテムが必要となり、その結果「土人の占めて居る國々では生物にしろ無生物にしろその名を何れかのトーテム集團に與へて居ないものはない」といふ様なことが、少しの誇張もなくそのまゝ事實となつて現はれるであらう。(Spencer & Gillen: *The Native Tribes of Central Australia*, p. 112.)。現に分裂の最も極端に行はれて居る Aranda に於ては四百四十二ものトーテムが數へられて居るのである (Strehlow: *Die Aranda- und Lortja-Stämme in Zentral-Australien*, II. S. 61-72.)。而してかくの如く分化した場合には、トーテムがその根源的な意味から夫々の集團の名稱或は紋章の役割を演ずるものに轉化することも亦、極めて自然に理解せられるであらう。しかしそれと同時に、かくして區別された小集團が決して stranger の如く振舞ふのではなく、諸々のトーテムが相寄り相集つて一種の階層的組織を形づくり、以て全部族を統一する役割を果して居る側面も亦、見違されてはならないであらう。そして此の側面に於ては、トーテムは依然としてその根源的な意味を喪失しては居ないのである。

(二) 山崎正武「動物の社會生活」一三九—一四〇頁。
フレイザーに依れば、タブー又はタブーなる語は「タ」即ち「標示する」といふ動詞と「ブー」即ち意味を強める副詞より成り、その原意は「強く標示されたもの」といふのであつて、通常嚴かに或るものを指定して之を神聖なりとする意義に用ひられるといふ。プリントンも亦ほゞ之に類似した見解をとり、タブーは「タバ」即ち「指名する」といふ動詞より由來し、「嚴肅に神聖なるもの」として指定せられたるが故に凡俗の褻れ瀆すを許さざるもの」との意義であり、又「タブイ」といふときは「神聖なるものとなす」の意義を有し「タブイ」といふときは「避ける」の意義を有するものとする。その他各地に於ける同義語が神聖・忌諱・褻瀆・禁戒・凶兆などの意義を有するところから、これらを総括して一般に、或るもの又は或ることが神聖なりとせられる結果、之に褻れ之に觸れて瀆すことは避けられ、従つて又之に褻れ之を瀆すべからずといふ禁戒を生じ、その禁戒を破りたるものは制裁として罰を蒙るべきものであるが故にひいては凶兆なる意義を有するに到つたものとせられるのである。(一) 人間の社會生活がかかるタブー或はそれより進化

した法なしにはあり得なかつたといふことは、人間社會が決して單におのづから成るものではなくして、常に内外よりの破壊作用に對して守られることによつてのみ存在し得るものであることを何よりも雄辯に物語るものと云はねばならぬ。人間が自然から離れ自然に背くことによつて生れるものである以上、動物の如くおのづから成る自然的有機的聯關の中に止住し得ないのは當然であつて、若し終始閉ぢた秩序の中にとどまるならば、それは人間が動物の世界へ顛落したことを意味するであらう。しかしこのことは決して悲しむべきことではなく、動物へ顛落し得る可能性は同時に人間の人間たる所以を發揮し得る可能性と相即し、單なる「秩序」をではなくその閉鎖性を破つて輝しき「進歩」を約束することになるのである。

(一) 穂積陳重「法律進化論」第三卷

さきに吾々は、相互的融即の具象的表現としてのテーマ或はテーマ的なるものを中心として地域と祖先と集團とが一體をなすとき、そこに一つの閉ぢた人間社會が成立するであらうことを述べた。しかし嚴密にいへば、それは比較的閉ぢた人間社會といふ意味であつて、「絶

對的に閉ぢた人間社會」は一つの矛盾概念である。それは「人間社會ならぬ人間社會」といふに等しい。事實また、嚴格なるタブーによつて一體性を只管その崩壊から守る未開社會に於ても、決して單なる消極的保守に終始するものではない。單なる消極的保守は人間社會としての生命の枯死を意味するからである。例へば最も緊密な一體性を實現する婚姻が、未開社會に於て如何なる形に於て行はれて居るかを見よ。所謂近親婚を禁止する外婚制がいかなる事情の下に一般に廣く人類社會に行はれる様になつたか、といふ起原に關しては諸説紛々として歸一するところを知らないものの如くであるが、それを假說的に説明することはさて置き、之を機能的に觀れば、それは單に消極的に近親婚或は内婚が本來一體的な集團氣の中に、排他的な特殊な結合をつくり上げることによつてその一體性を傷つける結果になることを防ぐのみならず、むしろ積極的にその集團の閉鎖性を打ち破つて他の集團と接觸せしめ以て社會を開くはたらきを示して居ることは、見逃すことの出来ない事實である。社會の最も緊密な核心的結合を形づくる婚姻が、集團の閉鎖性を打破する機能に於てその力強い姿を示して居ることは、

味ふべきことでなければならぬ。かくして外婚制によつて絶えず——系譜的には——血族關係なきものを受け入れねばならぬとするならば、社會の一體性は如何にして保たれるであらうか。

岡田氏の實地調査に依れば、例へば北ツオウ族（高砂族）はその親縁關係の程度に従つて小氏族・中氏族・大氏族の三つに分たれど、そのうち中氏族が外婚の單位となつて居るのであるが、同じ中氏族に屬する男女は何代距ても婚姻することは許されない。しかし婚姻が禁ぜられて居るといふことは逆に結合の強固なことを示して居るのであつて、中氏族の成員は何事によらず助け合ひ例へば共同して狩獵に出かけ或は仕事の手傳をし或は婚姻の際には酒食を持寄つたり酒宴に招かれたりするのであるが、中氏族結合の基礎となるものは神聖な粟の共食であつて、粟の初穂摘みの時に祭田から一束づつ摘んで來た粟を共食し且新粟で造つた酒を共に飲むことによつて、系譜的には全く血縁關係のない他所の者もあらたに中氏族員となるのである。□否、その場合の「中氏族員となる」は實は「中氏族員とせられる」ことを意味する。所謂「血縁」と呼ばれ「地縁」と稱せられるものも、決

して單なるなまのなまの自然的聯關ではなくして、つくられた機構的聯關によつて再編成されたものであることが注意せられねばならぬ。かくして社會の一體性がつねに神聖なる共食によつて確保され高揚されるものとするならば、社會は一般に、かかる共食によつて典型的に代表される様な行事——或は更にその發展としての政治——を必須條件として要求するものであり、自然的有機的聯關をつねに機構的聯關によつて再編成することなしには、凡そ人間の社會なるものは成立し得ないのである。

(一) 小氏族は最も結合の強い親族集團であつて一定の固有名詞を以て呼ばれて居るもの、此の小氏族が數箇集つて中氏族を構成して外婚の單位となり、中氏族は更に數箇集つて大氏族を構成する。大氏族の成員はそれを構成する凡ての小氏族の所有狩獵地へ自由に狩獵に行ける權利をもつて居る。

(二) 岡田謙「原始社會」三二—三五頁。

(三) 神聖なる共食を中核とする「まつり」が「まつりごと」にながる所以も、かくして正當に理解せられるであらう。